

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

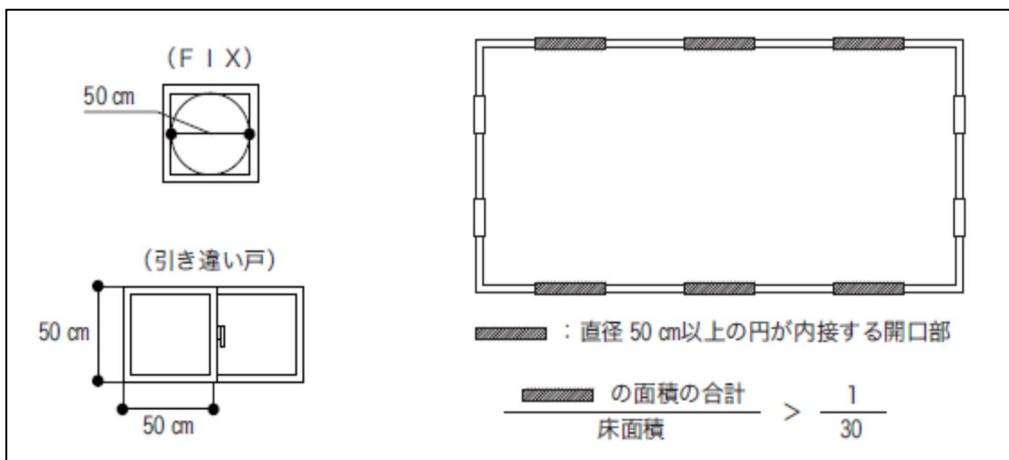
無窓階の判断は、次によること。

1 無窓階以外の階の床面積に対する開口部の割合

規則第5条の3に規定する床面積に対する避難上又は消火活動上有効な開口部の割合は、次によること。

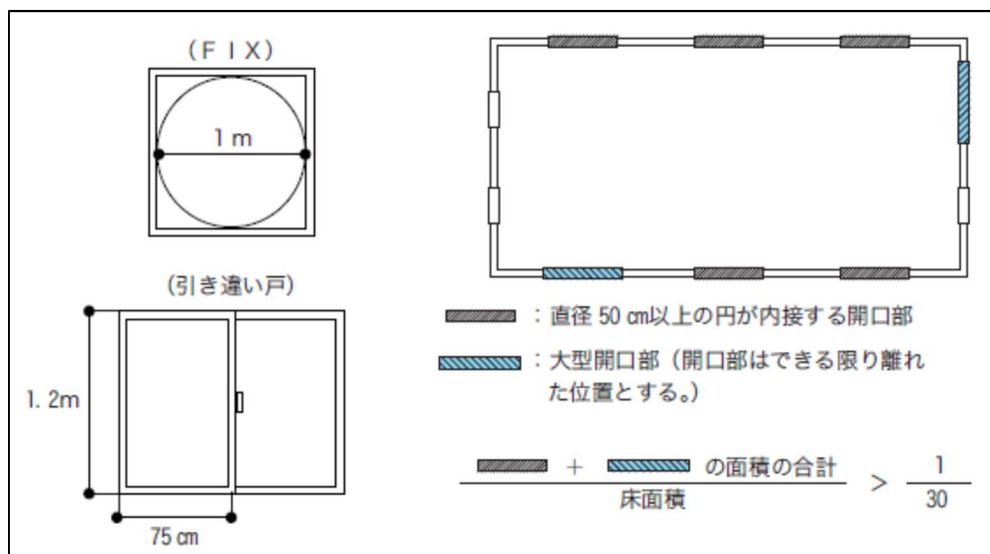
(1) 11階以上の階の場合

直径50cm以上の円が内接することができる開口部の面積の合計が当該階の床面積の30分の1を超える階



(2) 10階以下の階の場合

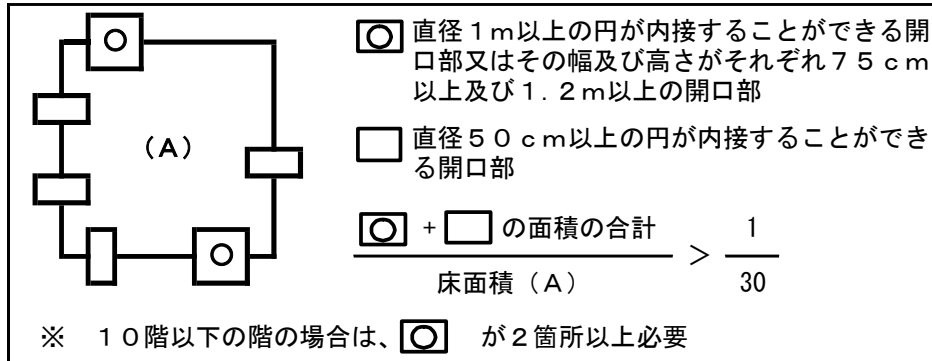
直径1m以上の円が内接することができる開口部又は幅及び高さがそれぞれ75cm以上及び1.2m以上の開口部を2以上有し、かつ、当該開口部



第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

の面積と直径50cm以上の円が内接することができる開口部の面積との合計が当該階の床面積の30分の1を超える階

《無窓階以外の階の例》



2 F I Xの取扱い

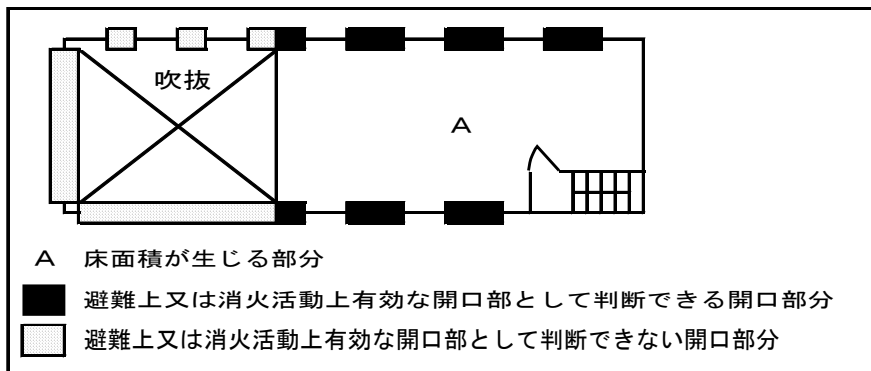
F I X（はめ殺し窓をいう。）の取扱いについては、当該防火対象物の実情に応じて判断するものであること。

3 避難上又は消火活動上有効な開口部

開口部が避難上又は消火活動上有効な開口部であるかの判断は、次によること。

- (1) 屋内に吹き抜け状の部分がある場合は、床面積が生じる部分に面する部分の開口部を避難上又は消火活動上有効な開口部として判断すること。

《吹き抜け状の例》

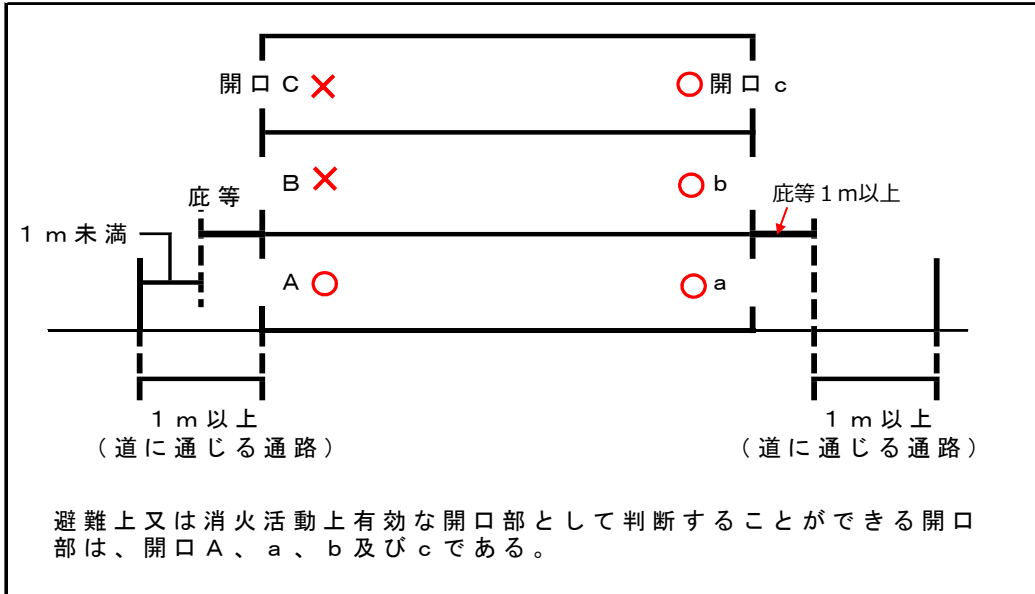


- (2) 敷地内の通路その他の空地に面する開口部に庇、下屋等が存する場合は、避難上又は消火活動上有効な開口部とすることはできない。ただし、庇、下屋等の開口部に面する側又は両側側面のいずれかの先端から隣地境界線までの幅員が1m以上あり、かつ、庇、下屋等が外部から開放し、又は容易に破壊するための足場として有効である場合は、当該庇、下屋等に面する開口部を避難上又は消火活動上有効な開口部として判断することができる。

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

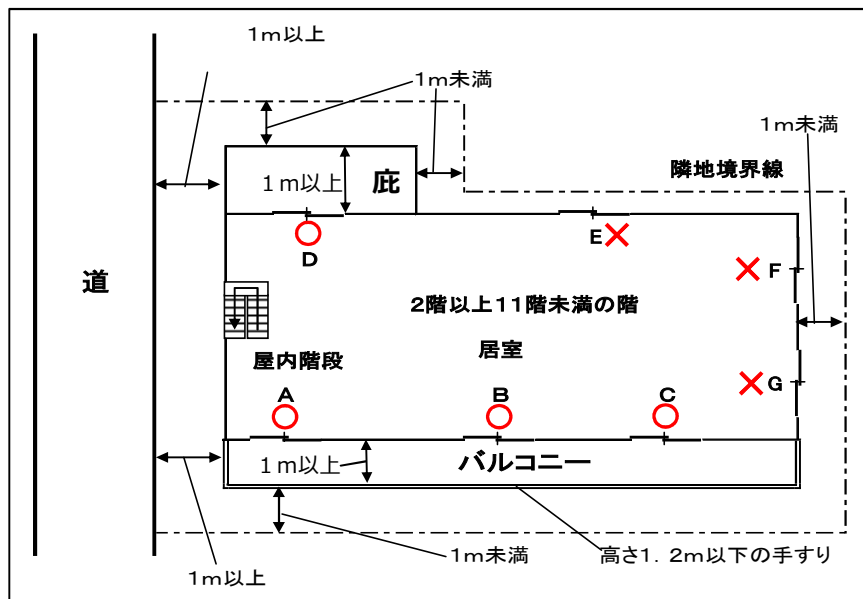
※容易に破壊するための足場として有効である場合とは、堅牢な足場で幅員1 m以上ある場合とする。

《庇等の設置例1（建築物断面図例）》



《庇等の設置例2（建築物平面図例）》

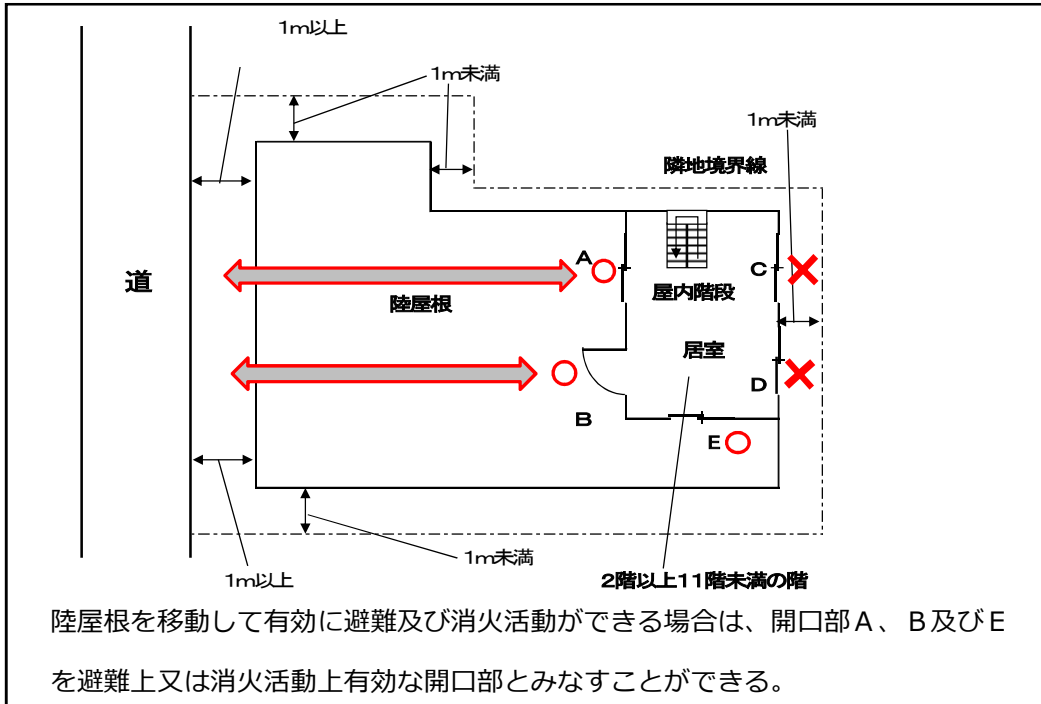
例①



避難上又は消火活動上有効な開口部として判断することができる開口部は、開口A、B、C及びDである。

※ ただし、B、Cについては、バルコニーが幅員1.0 m以上で通路として有効に機能するよう維持管理がなされる場合に限る。

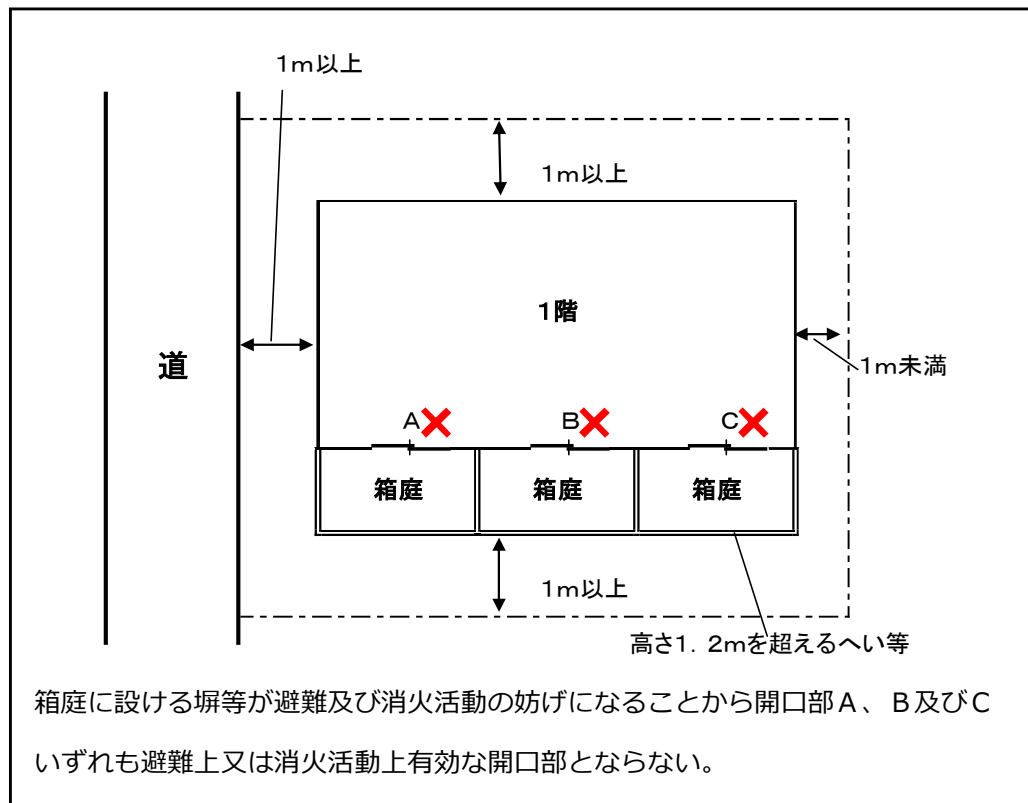
第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）



(3) 敷地内の通路その他の空地に設ける樹木、へいその他の工作物は避難及び消火活動の妨げにならないものとする。

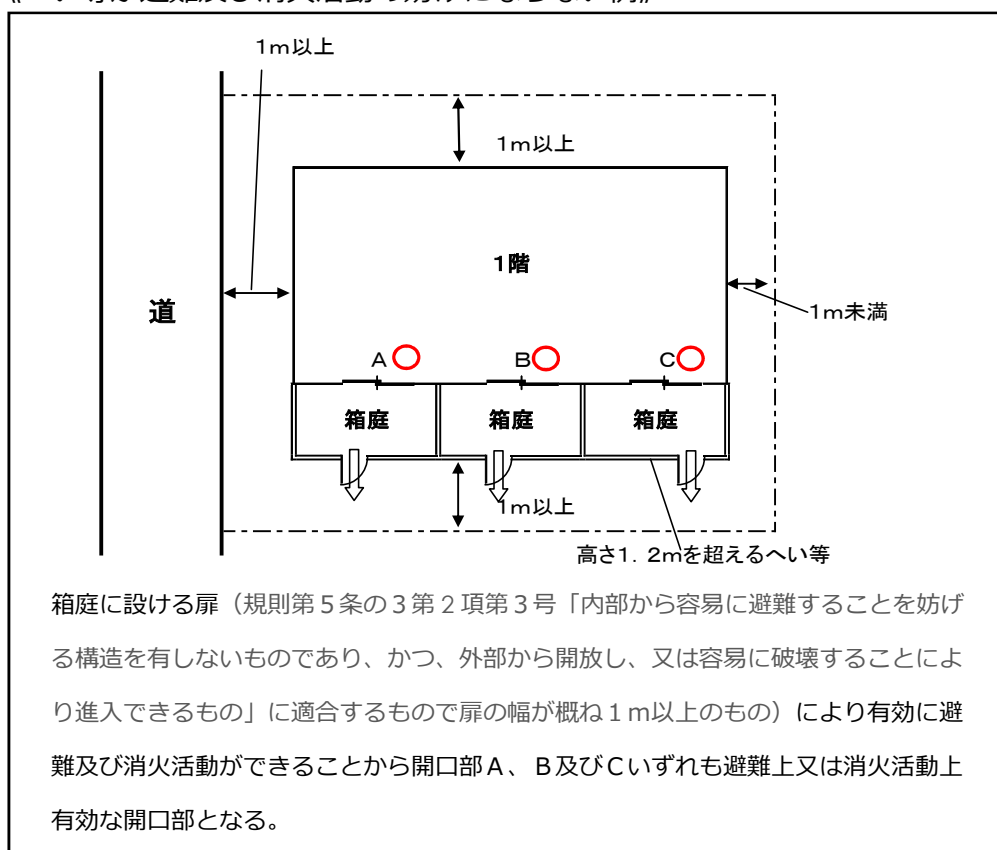
- ・開口部の前面にない樹木（道に通じる幅員 1 m 以上の通路にある樹木に限る。）で、避難及び消火活動に支障がないものは除く。

《へい等が避難及び消火活動の妨げになる例》



第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

《へい等が避難及び消火活動の妨げにならない例》

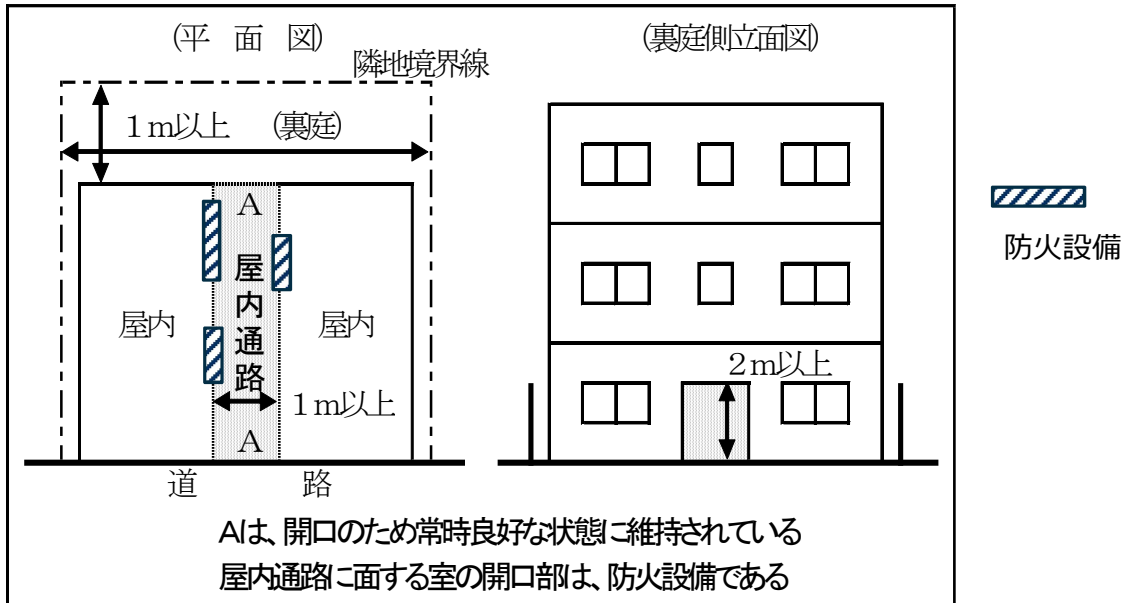


- (4) 避難階（建基令第13条第1号に規定する避難階をいう。以下、この第5において同じ。）に存する屋内通路を介して道に通じていない裏庭、空地等まで至ることができる防火対象物で次に適合する場合は、裏庭、空地等に面する開口部についても避難上又は消火活動上有効な開口部として判断することができるものとする。

- ア 屋内通路は、幅員1m以上、かつ、高さ2m以上であること。
- イ 裏庭、空地等の幅員は、隣地境界線から1m以上であること。
- ウ 屋内通路は、開口のため常時良好な状態に維持されていること。
- エ 屋内通路に面する室の開口部は、防火設備であること。

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

《有効な開口部と判断できる裏庭の例》



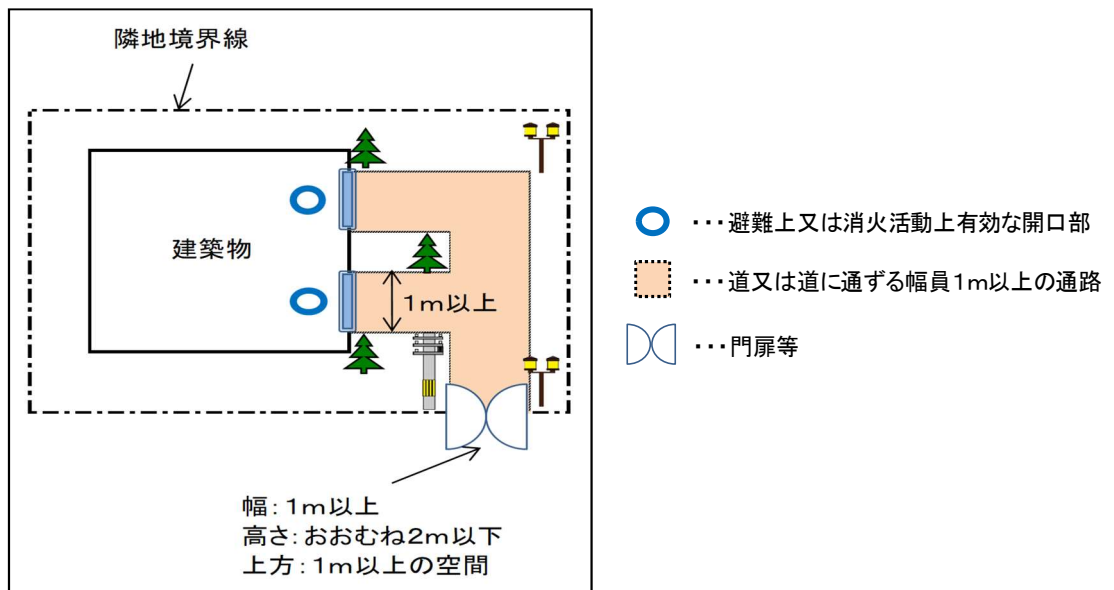
(5) 幅員1m以上の通路に門扉等を設ける場合は、次によること。◇

ア 門扉等の開放状態での有効幅員は、1m以上であること。

イ 門扉等には、原則として施錠装置等を設けないこと。ただし、周囲の状況等から、避難上又は消火活動上支障が無いと認められる場合はこの限りではない。

※ 保育園や女子寮等において防犯等を目的として設けられた門扉等については、当該基準の適用が困難なケースも考えられるが、当該基準はあくまでも指導基準であることに留意すること。

《幅員1m以上の通路に設ける門扉等の例》



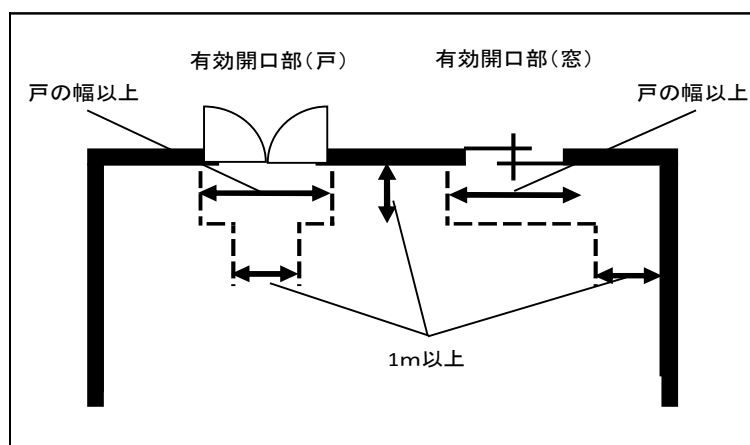
第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

- (6) 避難上又は消火活動上有効な開口部に面する室内の管理は、次によること。
ただし、避難上又は消火活動上支障が無いと認められる場合はこの限りではない。◇

ア 室内の避難上又は消火活動上有効な開口部に面する部分には、幅員1m以上の通路を確保すること。

イ アの通路には、避難上又は消防活動上支障となる物品を置かないこと。

《室内に確保する通路の例》



- (7) 外壁に面する開口部にシャッターが設置されている場合は、避難上又は消火活動上有効な開口部とすることはできない。ただし、次のいずれかに適合するシャッターが設置されている場合は、シャッターに面する開口部についても避難上、又は消火活動上有効な開口部として判断することができる。

ア 施錠装置等がなく、屋内及び屋外から容易に開放することができるもの

イ 施錠装置等がある場合は、自動火災報知設備又は煙感知器の作動と連動して解錠し、屋内及び屋外から手動又は電動で開放できる装置を備えているもの（非常電源付きのものに限る。）

ウ シャッターの水圧開放装置として評定を受けた評定品が設置されているもので、屋内及び屋外から容易に開放することができるもの。この場合において、水圧開放装置とは、動力消防ポンプ（動力消防ポンプの技術上の規格を定める省令（昭和49年自治省令第35号）第2条に定めるものをいう。）による注水によって、シャッターを開放する装置で次に掲げる方式のものをいう。

(ア) シャッターの施錠を開放する方式のもの

(1) シャッターを開放する方式のもの

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

(ウ) シャッターの押ボタンスイッチ等を作動させる方式のもの（自家発電設備又は蓄電池設備による非常電源が附置されたものに限る。）

エ オーバーヘッドドア（オーバースライダー）は、屋内から手動又は非常電源により開放することができるもので、前ア、イ、ウに掲げるもの

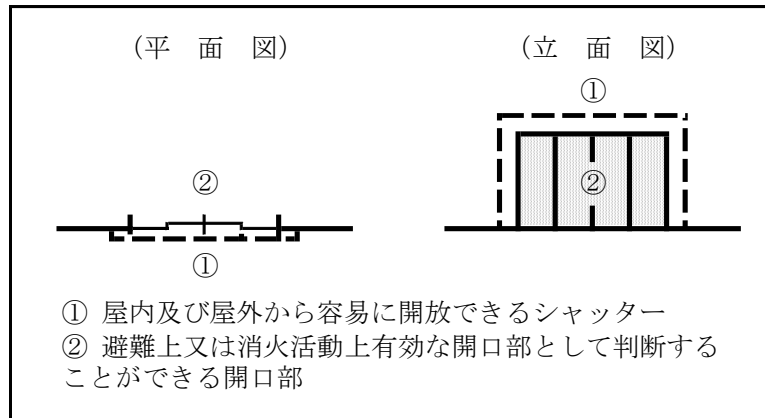


- 備考 1 水圧開放装置は、床面からの高さが1 m以下となる箇所に設けること。
- 2 水圧開放装置の注水口の直近に容易に消えないように、次に適合する表示をするものであること。
- ・表示面は、反射塗料とし、黄色の地に赤色の「消」の文字とすること。
 - ・文字の大きさは、50 mm²以上とすること。
 - ・前の表示の周囲には、これとまぎらわしい又はこれをさえぎる広告物、掲示物等を設けないこと。

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

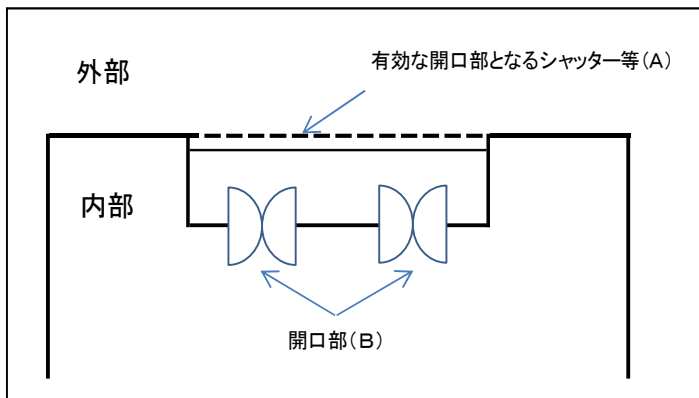
オ 共同住宅等の雨戸として設けられた施錠装置等があるもので、開口部に建基令第126条の7第5号に規定するバルコニー等消防活動スペースが確保され、かつ、屋外より消防隊が特殊な工具を用いることなく容易に開放できる手動式軽量シャッター（JIS A 4704 で定めるスラットの板厚が1.0mm以下のものに限る。）

《有効な開口部と判断できるシャッターの例》



- (8) シャッター等とその他の戸が2重に設けられている場合で、外側の開口部を避難上又は消火活動上有効な開口部と判断するときは、内側の建具の構造等を、避難上又は消火活動上有効な開口部に準じるよう指導すること。◇

《シャッター等とその他の戸が2重に設けられている例》



※ 開口部Aを避難上又は消火活動上有効な開口部と判断する場合は、開口部Bの構造等を、避難上又は消火活動上有効な開口部に準じるよう指導すること。

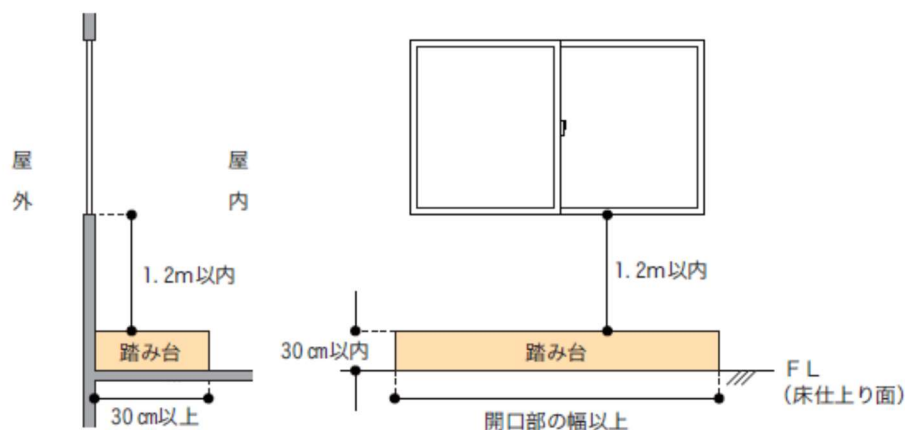
4 開口部の高さ

次に適合する台が設けられている場合は、規則第5条の3第2項第1号「床面」とあるのを、「台の踏み面」と読み替えることができる。

- (1) 不燃材料で造られ、かつ、堅固な構造であること。

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

- (2) 開口部に面する壁面との間に隙間がなく、床面に固定されたものであること。
- (3) 床面から台の踏み面までの高さがおおむね30cm以下であること。
- (4) 踏み台の上端から開口部の下端までの高さは、1.2m以内であること。
- (5) 台の大きさは、奥行30cm以上、かつ、避難上又は消火活動上有効な開口部分の幅以上であること。



5 開口部の構造

規則第5条の3第2項第3号「内部から容易に避難することを妨げる構造を有しないものであり、かつ、外部から開放し、又は容易に破壊することにより進入できるもの」は、次に掲げるものとする。

- (1) 内部から鍵を用いることなく開錠し、開放できる構造の開口部で、次に掲げるガラスを用いるもの

ア 単板ガラスの場合

(ア) フロート板ガラス(JIS R 3202)、磨き板ガラス(JIS R 3202)、型板ガラス(JIS R 3203)、強化ガラス(JIS R 3206)、熱線吸収板ガラス(JIS R3208)、熱線反射ガラス(JIS R 3221)又は耐熱板ガラスで厚み6mm以下のもの

(イ) 網入板ガラス(JIS R 3204)又は線入板ガラス(JIS R 3204)で、厚み6.8mm以下のもの。ただし、バルコニー、庇、下屋等の破壊作業ができる足場がある場合は、10mm以下とすることができる。

イ 合わせガラス(JIS R 3205)の場合

(ア) 別記「合わせガラスに係る破壊試験ガイドライン」に規定する、破壊試験に合格したもの

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

- (イ) 中間膜に膜厚30mil(0.76mm)以下のポリビニルブチラール(以下、この第5において「PVB」という。)を使用するもので、次の厚み以下のもの
- a フロート板ガラスで、厚み6mm以下のものを合わせたもの
 - b フロート板ガラスで、厚み5mm以下のものに、網入板ガラス又は線入板ガラスで、厚み6.8mm以下のものを合わせたもの
- (ウ) 中間膜に膜厚60mil(1.52mm)以下のPVBを使用するもので、次の厚み以下のもの。ただし、バルコニー、庇、下屋等の破壊作業ができる足場がある場合に限る。
- a フロート板ガラスで、厚み5mm以下のものを合わせたもの
 - b フロート板ガラスで、厚み6mm以下のものに、網入板ガラス又は線入板ガラスで、厚み6.8mm以下のものを合わせたもの
 - c フロート板ガラスで、厚み3mm以下のものに、型板ガラスで、厚み4mm以下のものを合わせたもの

《合わせガラスを示すマーク》



ウ 複層ガラス (JIS R 3209) の場合

- (ア) 次のいずれかのガラスといずれかのガラスを2枚組み合わせたもの
- a フロート板ガラス、磨き板ガラス、型板ガラス、強化ガラス、耐熱板ガラス、熱線吸収板ガラス又は熱線反射ガラスで、厚み6mm以下のもの
 - b 網入板ガラス又は線入板ガラスで、厚み6.8mm以下のもの。ただし、バルコニー、庇、下屋等の破壊作業ができる足場がある場合は、10mm以下とすることができる。
- (イ) フロート板ガラス、磨き板ガラス又は型板ガラス、強化ガラス、耐熱板ガラス、熱線吸収板ガラス又は熱線反射ガラスで、厚み6mm以下のものに、合わせガラス(前イ、(イ)に規定するものに限る)を組み合わせたもの
- (ウ) フロート板ガラス、磨き板ガラス、型板ガラス、強化ガラス、耐熱板ガラス、熱線吸収板ガラス又は熱線反射ガラスで、厚み6mm以下のものに、合

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

わせガラス（前イ、ウ）に規定するものに限る）を組み合わせたもの。ただし、バルコニー、庇、下屋等の破壊作業ができる足場がある場合に限る。

(2) 内部から鍵を用いることなく開錠し、開放できる構造の開口部で、次のいずれかにより外部から開放できるもの

ア 施錠装置等がなく、屋外から容易に開放することができるもの

イ 施錠装置等がある場合は、自動火災報知設備又は煙感知器の作動と連動して解錠し、屋外から手動又は電動で開放できる装置を備えているもの（非常電源付きのものに限る。）

ウ 水圧開放装置として評定を受けた評定品が設置されているもの

エ ガラス小窓付き（各辺15cm以上）の鉄扉等で、当該小窓を局部破壊することにより、近傍にあるサムターン錠等を容易に開錠することができるもの

図寸法	図1	図2
施錠方法	外：シリンダー錠 内：サムターン錠	外：シリンダー錠 内：サムターン錠

(3) 次に掲げる状態のものは、常時良好な状態として取り扱うことができる。

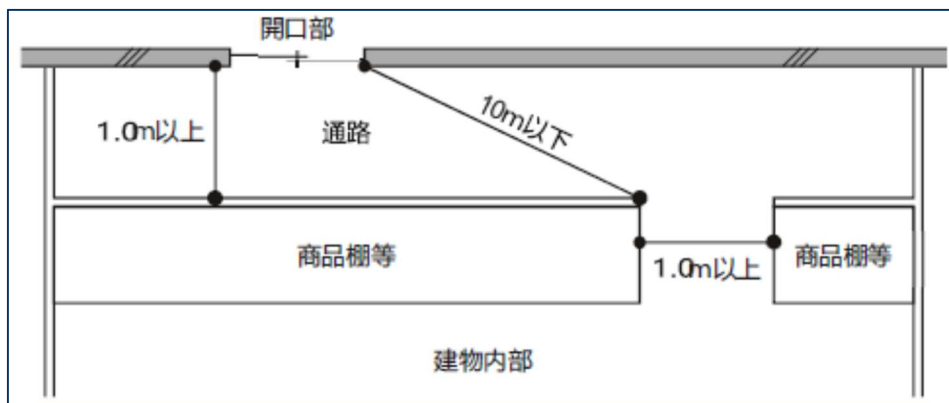
ア 格子、ルーバー、開口部に接近して設けられている広告物、看板、日除け、雨除け等を避難及び消火活動上の妨げにならないように設けたもの

イ 開口部と間仕切壁等の間に通路を設け、間仕切壁等に出入口を有効に設けたもので、次のすべてに適合するもの又はこれと同等以上に支障がないと認められるもの

(ア) 通路は通行又は運搬のみに供され、かつ、可燃物等が存置されていないこと等、常時通行に支障ないこと。

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

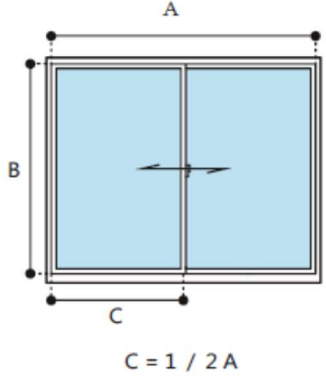
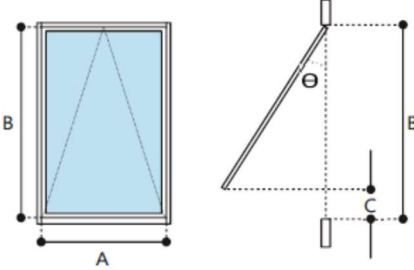
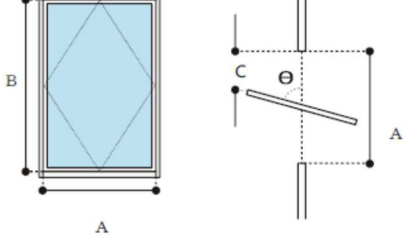
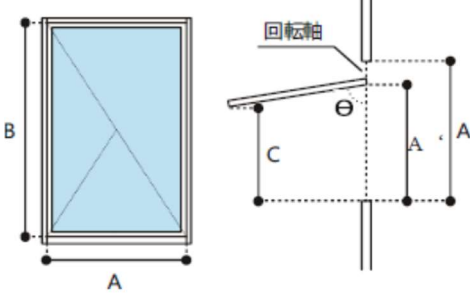
- (イ) 通路及び間仕切壁等の出入口の幅員はおおむね1 m以上であること。
- (ウ) 間仕切壁等の出入口と外壁の当該開口部との歩行距離は、おおむね10 m以下であること。



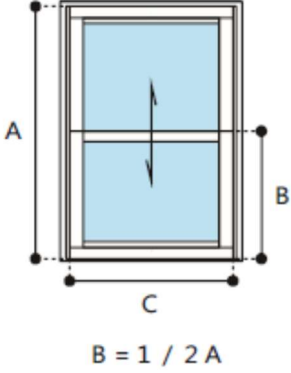
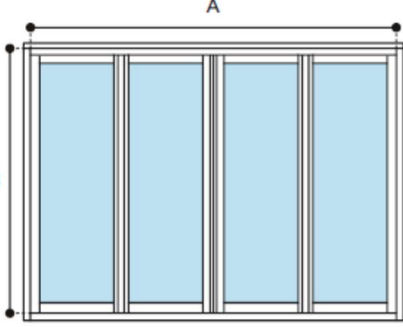
- ウ 窓部分を合板等で閉鎖したり、開口部の前面に棚等（容易に移動等することができるものを除く。）を設けたりすることにより、開口部を使用不能の状態にする等避難及び消火活動上の妨げとなっているものは、認められないこと。
- エ 営業中は、省令第5条の3に規定する開口部を有するが、閉店後は、重量シャッター等を閉鎖することにより無窓階となる階で、かつ、防火対象物全体が無人となる防火対象物の当該階の消防用設備等の設置については、政令第32条の規定を適用することができる。ただし、政令別表第1（14）項に掲げる防火対象物は、除くものとする。

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

表1 《開口部の有効寸法》

名称	例示	有効寸法の算定
引違い窓	 <p style="text-align: center;">$C = 1/2 A$</p>	<p>B×Cとする。(ただし、表2の凡例が○の場合は、B×Aとする。)</p> <p>なお、次による寸法の場合は、50 cm以上の円が内接するものと同等以上として取り扱うことができる。</p> <p>B = 1.0m (0.65m) 以上 C = 0.45m (0.4m) 以上</p> <p>(注) () 内は、バルコニー等がある場合</p>
突出し窓		<p>A×Cの部分とする。</p> <p>$C = B (1 - \cos\theta)$</p> <p>(注) θ は最大開口角度 90°以下</p>
回転窓		<p>B×Cの部分とする。</p> <p>$C = A (1 - \cos\theta)$</p> <p>(注) θ は最大開口角度 90°以下</p>
すべり出し窓		<p>B×Cの部分とする。</p> <p>$C = A' (1 - \cos\theta)$</p> <p>(注) θ は最大開口角度 90°以下</p>

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

<p>上げ下げ窓</p>	 <p style="text-align: center;">$B = 1 / 2 A$</p>	<p>$B \times C$とする。</p> <p>なお、次による寸法の場合は、50 cm以上の円が内接するものと同等以上として取り扱うことができる。</p> <p>$B = 1.0\text{m}$ (0.65m) 以上 $C = 0.45\text{m}$ (0.4m) 以上</p> <p>(注) ()内は、バルコニー等がある場合</p>
<p>折れ戸</p>		<p>$A \times B$とする。</p>

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

表2 《開口部の条件とガラスの種類》

開口部の条件（厚み・組合せ）			判 定					
			フィルムなし		フィルムあり			
					フィルムA		フィルムB	
ガラス開口部の種類			足場有り	足場なし	足場有り	足場なし	足場有り	足場なし
フロート板ガラス(普通) 磨き板ガラス 型板ガラス 強化ガラス 熱線吸収板ガラス 熱線反射ガラス	6mm 以下	引違戸	○	○	○	○	○	○
		F I X	○	○	○	○	○	○
網入板ガラス 線入板ガラス	6.8mm 以下	引違戸	△	△	△	△	△	△
		F I X	×	×	×	×	×	×
	10mm 以下	引違戸	△	×	△	×	△	×
		F I X	×	×	×	×	×	×
合わせガラス	(1) フロート板ガラス6mm以下+PVB(ポリビニルブチール)30mil(膜厚0.76mm)以下+フロート板ガラス6mm以下の合わせガラス (2) 網入板ガラス6.8mm以下+PVB30mil(膜厚0.76mm)以下+フロート板ガラス5mm以下の合わせガラス	引違戸	○	○	△	△	△	×
		F I X	×	×	×	×	×	×
	(1) フロート板ガラス5mm以下+PVB60mil(膜厚1.52mm)以下+フロート板ガラス5mm以下の合わせガラス (2) 網入板ガラス6.8mm以下+PVB60mil(膜厚1.52mm)以下網入板ガラス6.8mm以下+PVB60mil(膜厚1.52mm)以下+フロート板ガラス6mm以下の合わせガラス (3) フロート板ガラス3mm以下+PVB60mil(膜厚1.52mm)以下+型板ガラス4mm以下の合わせガラス	引違戸	△	△	△	×	△	×
		F I X	×	×	×	×	×	×

複層ガラス

構成するガラスごとに本表（網入りガラス及び線入りガラスにあつては、厚さ6.8mm以下のものに限る。）により評価し、全体の判断を行う。

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

- ：規則第5条の3第2項第3号に規定する開口部として取り扱うことができる。
△：ガラスを一部破壊し、外部から開放できる部分（表1の例によること。）を有効開口部として算定に加えるこのできるもの（クレセントやレバーハンドル自体に鍵付きとなっている等の特殊なものについては、個別に判断すること。）
×：規則第5条の3第2項第3号に規定する開口部として取り扱うことができない。

- 備考 1 「足場有り」とは、地面、階段等の踊り場、バルコニー等で破壊作業ができるものをいう（折板屋根等を除く。ただし、グレーチング、パンチングメタル等で幅1m以上の消火足場を設けた場合は、認められる。）。
- 2 「引違い戸」とは、片開き、開き戸を含め、通常は部屋内から開放することができ、かつ、当該ガラスを一部破壊することにより外部から開放することができるものをいう。
- 3 「FIX」とは、はめ殺し窓をいう。
- 4 開口部は、2以下の鍵（クレセント錠又は補助錠をいう。）を開錠することにより開放することができるものとする。
- 5 開口部に鍵付き開口制限ストッパーを設けた場合は、判定欄の△印のものは、有効開口部として扱えないものとする。
- 6 有効開口部として扱えないものであっても、容易にガラス窓を取り外すことができる場合は、認めて差し支えない。

（参考）

○フィルムA：開口部のガラスに貼付された窓用フィルムのうち基板の性能に影響を与えない次のものをいう。

- (1) PET製窓ガラス用フィルムのうち、多積層（引裂強度を強くすることを目的として数十枚のフィルムを重ねて作られたフィルムをいう。以下同じ。）以外で、基材の厚さが100 μ m以下のもの（内貼り用、外貼り用は問わない。重ね貼り不可。）を貼付したガラス
- (2) 塩化ビニル製窓ガラス用フィルムのうち、基材の厚さが400 μ m以下のもの（内貼り用、外貼り用は問わない。重ね貼り不可。）を貼付したガラス
- (3) 低放射ガラス（通称Low-E膜付きガラス）（スパッタリング製法又はパイロティック製法により、金属又は酸化金属で構成された薄膜を施した低放射ガラスであること。）

○フィルムB：開口部のガラスに貼付された窓用フィルムのうち次のものをいう。

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

- (1) P E T製窓ガラス用フィルムのうち、多積層以外で、基材の厚さが100μmを超え400μm以下のもの（内貼り用、外貼り用は問わない。重ね貼り不可。）を貼付したガラス
- (2) P E T製窓ガラス用フィルムのうち、多積層で、基材の厚さが100μm以下のもの（内貼り用、外貼り用は問わない。）を貼付したガラス

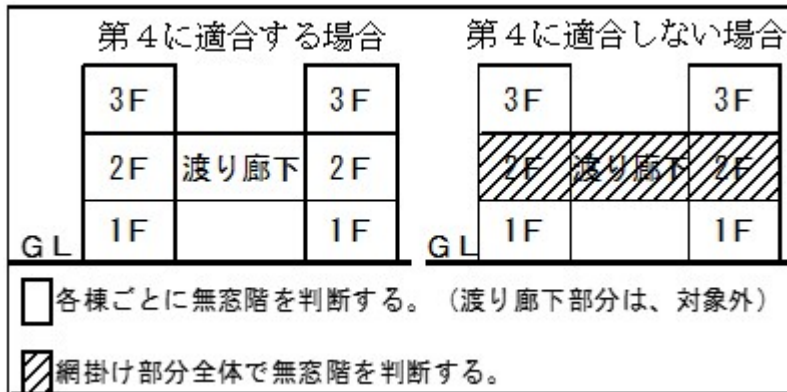
5 その他

- (1) 令8区画が存する階は、区画された階の部分ごとに無窓階の判断を行うこと。
- (2) 渡り廊下等で接続されている階は、次のとおり取り扱うものとする。この場合において、渡り廊下等で接続されている階以外の階は、それぞれの棟において無窓階の判断を行うこと。

ア 第4 消防用設備等の設置単位の規定に適合する渡り廊下等で接続されている階は、渡り廊下等の部分を除き、それぞれの棟において無窓階の判断を行うこと。

イ 第4 消防用設備等の設置単位の規定に適合しない渡り廊下等で接続されている階は、それぞれの棟及び渡り廊下等を一の階として無窓階の判断を行うこと。

《渡り廊下の例》



第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

別記

合わせガラスに係る破壊試験ガイドライン

1 適用範囲

このガイドラインは、防火対象物の開口部に JIS R 320.5 に規定する合わせガラスを
引き違い窓等として用いた場合に、外部から開放し、又は容易に破壊することにより進入
できることを確認する試験に適用する。

2 用語の定義

このガイドラインにおいて用いる用語の定義は、次による。

- (1) 破壊器具 消防隊が消防活動を行う際に防火対象物の一部を破壊するために使
用する器具をいう。
- (2) 打撃力 破壊器具を振り式に自由落下させることにより、ガラス面に与える衝
撃力をいう。
- (3) 打撃高さ 破壊器具を振り式に自由落下させる位置（ピッケル先端）とガラス面
に衝突する位置との高さの差をいう。
- (4) 足場 防火対象物の開口部の外部にバルコニー、屋上広場等の破壊作業のでき
る足場が設けられているものをいう。

3 ガラス破壊試験

(1) 供試体の寸法

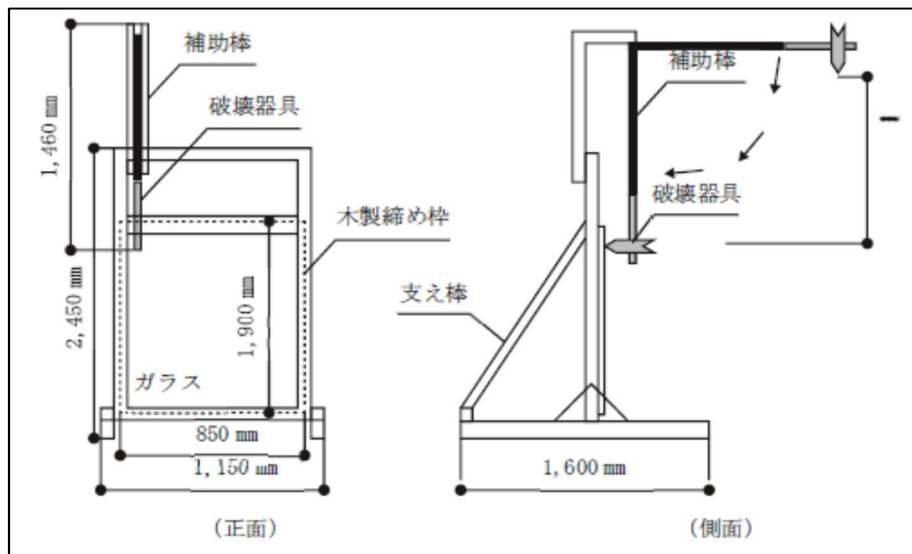
供試体は、高さ 1,930mm×幅 864mm とする。

(2) 試験装置

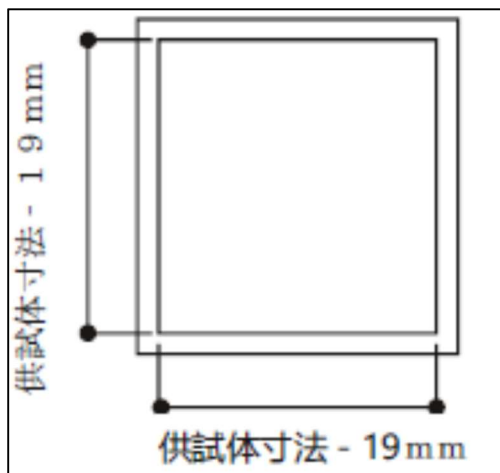
ア ガラス破壊試験装置は図 1 に示す本体、図 2 に示す締め枠及び図 3 に示す破壊
器具によって構成されるものとする。

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

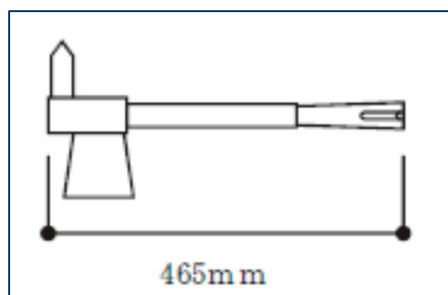
《図1 本体》



《図2 締め枠》



《図3 破壊器具》



第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

イ 本体の主要部分は鋼製とし、試験時において転倒しないようにコンクリート製床面等に直接設置するものとする。

ウ 供試体は図2に示す木製の締め枠を用いて取り付けした後、図1に示す本体に取り付けるものとする。

エ 供試体の4周と締め枠との接触部は、JIS K 6253に規定するデュロメータ硬さA50の帯状のゴム板を用いるものとする。また、供試体は、試験時において脱落、ずれ等を起こさないよう確実に固定するものとする。

締め枠の内のり寸法は、供試体寸法より約19mm小さくするものとする。

オ 締め枠は、試験時において脱落、動揺、ずれ及びぶれが生じないよう確実に本体に固定するものとする。

カ 次の(ア)から(イ)に適合する破壊器具を木製の補助棒を用いて試験装置に取り付けるものとする。なお、破壊器具のピッケル先端は、試験時において、著しく変形又は損傷しているものは使用しないこと。また、補助棒は、破壊器具が供試体に対し垂直に衝突できる形状及び固定方法とするものとする。

(ア) おの刃、鋸状刃、ピッケル及び柄から成るものとする。

(イ) 材質は、鋼製とする。

(ウ) 質量は、約2.7kgとする。

(エ) 長さは、約46.5cmとする。

(3) 打撃位置について

ア 一次破壊試験は、クレセントの想定位置（供試体高さの1.2）からガラス面内方向に水平125mmの位置とする。

イ 二次破壊試験は、クレセントの想定位置からガラス面内方向に水平1.25mの位置及び補助錠の想定位置（ガラス左上隅部）からガラス面内方向に縦横それぞれ125mmの位置とする。

(4) 試験方法

ア 特に指定がない限り、試験は平温状態において実施する。

イ 一次破壊試験

(ア) 供試体を締め枠に取り付けた後、締め枠を本体に取り付ける。この際、合わせガラスの屋外面を打撃側に取り付けるものとする。

(イ) 破壊器具を静止の状態における位置から打撃力を確保できる打撃高さ70cm（破壊作業のできる足場がある場所に限り設置するものにあつては、

第6 避難上又は消火活動上有効な開口部の取扱い（無窓階）

打撃力を確保できる打撃高さ180cm)の高さに保持した後、振子式に自由落下させ、前(3)アの位置をピックル部分で打撃し、その破壊状況を観察する。

- (ウ) (イ)の試験を最大3回(補助錠を設けるものにあつては、クレセント直近で最大3回又は補助錠直近の位置で最大3回)繰り返し実施する。

ウ 二次破壊試験

- (ア) イの破壊試験を行い合格となった供試体について、試験員が破壊器具を用いて二次的な破壊試験を実施する。一次破壊試験の打撃高さが70cmの場合は、破壊器具を片手持ちとし、打撃高さが180cmの場合は両手持ちとする。

- (イ) 試験員による二次破壊試験については、1枚の供試体につき一人の試験員が行い、かつ供試体6枚に対して複数の試験員で実施する。

4 判定基準

破壊試験は供試体6枚について行い、5枚の供試体が次の(1)及び(2)の基準に適合しなければならない。ただし、供試体6枚中連続して4枚が(1)及び(2)の基準に適合した場合は、供試体4枚をもって合格とする。

(1) 一次破壊試験

供試体を貫通又は供試体におおむね1cm以上のクラック・ひび割れ・くぼみ等が観察されたものを合格とする。なお、打撃回数が3回以内であっても、貫通又はおおむね1cm以上のクラック・ひび割れ・くぼみ等が観察された場合は、当該打撃回数をもって合格とする。

(2) 二次破壊試験

一の供試体につき60秒以内に15cm×15cm以上の開口を確保できたものを合格とする。ただし、それが確保できない場合であっても、容易に腕を通すことができる開口が確保された場合は合格とする。